

# 日本名婦伝

小野寺十内の妻

吉川英治

青空文庫



思い出もいまは古い、小紋こもんの小切れやら、更紗さらさの襦つづれや、赤い縮緬ちりめんの片袖など、貼板はりいたの面には、彼女の丹精が、細々こまごまと綴つづられて、それは貼はるそばから、春の陽に乾きかけていた。

「この小紋も、はや二十年ほどになるう。良人おっとの十内じゅうない様が、江戸詰のおもどりに、長ながの留守居ほらびの褒美ほうびぞと、お土産みやげに買うて下されたもの。性しょうの抜ぬけるほど、よう着た上、解といて頭巾ずきんになおしたり、お母様の胴着どうぎにもしたり……」

彼女は何かを楽しむように、貼り交ぜた小切れの数々をながめ

ていた。十九の頃、いまの良人の十内に嫁とついだときの物すらある。  
小野寺家の新妻として、まだ客にも羞恥はしろうていた時分の自分のす  
がたなど、思い出されて来る。

「おや、お母様。ほほほほ、お縁側から落ちるといけませんよ。  
御退屈なさいましたか」

庭さきから、ふと、陽あたりのよい小書院の縁をふり顧かえつて、  
丹女たんじょはあわてて、そこにいる老母のそばへ、起しに行つた。

良人の老母は、ことしもう九十であつた。——嫁よ、嫁よ、と  
呼ばれている丹女ですら、十内と添つてから三十余年、五十をす  
こし越えていた。

(わたくしが貼はりもの物をしているあいだ、ここのお蒲団ふとんにすわつて、

お花見をしておいで遊ばせ。ひがしやま 東山きよみずや清水のあたりの山桜が、

ここからちようどよく眺められますから)

と、子をあやすように、老母の退屈をなだめて、茶や菓子なども、その側へおいて、時々、庭さきと縁側とで、話しながら貼物をしていたのであったが、いつか老母は、こころよ快げにそこで居眠りをしていたのだった。

眼をさますと、老母は、わけもなく笑つて、

「嫁よめじよ女、十内はまだ帰りませぬか」

と、訊ねた。

「まだ、お戻りになりませぬが」

と彼女が答えると、

「今朝にかぎって、朝餉あさげもひとりで済ませ、どこへ行つたのである？ ……あの子は」

と、つぶやいた。

九十の母から、いまもって、あの子はあの子はと呼ばれている丹女の良人は——小野寺十内といい、赤穂あこうの臣で百五十石、現職は京都留守役、年はことし五十九であつた。

## 二

たいがいな藩の留守役というものは、交際上、派手はでで門戸を張つて、家族の生活までが、都風に化されていたが、小野寺家は、

京の町中にありながら、殆ど、郷土いなかの風をそのまま、一儒者じゆしゃの住居ぐらいな小門と籬まがきの中に、ただ清潔と簡素を誇つて暮して  
た。

「幸右衛門様こうえもん。……幸右衛門様は……？」

と、いまその門を、息喘いきぎつて駈かけこみながら、玄関おとなへは訪まわ  
ず、家の横を、見まわしている娘があつた。

年老つた仲ちゆうげん間の惣兵衛というのが、風呂桶へ水を汲みこん  
でいたが、

「お、お稲様いねか。……若旦那はそこのお書齋しよさいにいらつしやいま  
すよ」

と、何か心得顔にうす笑いしながら教えた。

お稲の声を知ると、幸右衛門はすぐ書齋をあけて濡れ縁ぬえんに出て来た。幸右衛門はこの養子だった。小野寺十内の姉が嫁とついだ先の大高家おおたかけに生れ、生家は兄の源吾げんごがすぎ、次男の彼は、叔父にあたる十内の養子となつて、まだ部屋住へやずみの身であつた。

「何か、世間で、騒々しいうわさをしていりますが、幸右衛門様は、まだ何もお聞きになりませんか」

駈けて来たせいもあるうが、お稲の顔いろこそ、血の色に躁さわいでいた。声を嚙のみ、動悸どうきを抑えながら、告げるのだつた。

「——ゆうべも、また今朝も、赤穂のほうへ、浅野家の方たちが、早駕はやかごにのつて、次々に急いで行つたとやらで、町の衆が、いろいろ噂うわさをしておりますが」



お稲は、二条に住む歌人金勝千秋かねかつちあきの娘だった。十内も妻の丹女も、風雅のたしなみがあるので、歌の会、茶の筵えんなど、折々に招きあっている。——幸右衛門とお稲とも、その風交のあいだに知り初そめただけのきれいな交わりに過ぎなかつたが、それに恥じないにせよ、どっちの家も嚴格なので、やはり葉がくれの花のように、人目は惧おそれあっていた。

「えっ、浅野家の早打ちが？」

思い当る事があるらしく、幸右衛門がこう緊張を眸ひとみに見せたと  
き、玄関の方で、養父の十内の声がした。

「あつ、養父ちちが帰つて来た」

出迎えに立つと、それを機しおに、お稲もすぐ帰つて行つた。もつ

と、訊ねもし、語りもしたい思いは、もちろんお互いにいっぱい  
だったが一。

## 三

常と少しも変りのない十内であつたが、帰るとすぐ、

「於丹<sup>おたん</sup>、茶漬<sup>ちぢ</sup>をくりやれ」

と、午<sup>ひる</sup>の食事を求め、

「ついでに、弁当をふたつ、調<sup>ととの</sup>えておけ」

と、いいつけた。

「はい」

と、丹女は、膳ごしらえに、すぐ台所へ入った。——良人の唐とう突うとつないいつけに対しても、なぜ？ とか、何しに？ とか云うような問いは、良人から打明けられない限り、諄くどくは訊かないことが、この家の慣やわならしであった。

（——云うにも云えぬ、公おおやけの場合もある。男の肚はらというものもある。告げてよい事なら元より告げるが、語らぬことは、良人を信じて、自然、分つて来る日なり、語れる日まで問わぬがいい）  
もう三十年も前、ここへ嫁とついで来たときに云われたことばを、その通り守つて、その通り信じ合つて、少しも疑いというものをその間に抱き合わずに来た夫婦である。

「於丹おたん、母上はどちらか」

「いま、お昼寝を遊ばしていらつしやいます」

「そうか。……小袖、割羽織、きやはん脚絆など、旅用のもの、そこへ揃えてください」

「お旅立ちでございますか」

「ウむむ。……急にの、お国くにもと許まで」

「幸右衛門をお連れ遊ばしますか。それとも、お供はやはり若わかと党うの佐平を」

「そうだな？」と、ふと考えこむふうであつたが——「佐平にしよう。……幸右衛門をこれへ呼んでください」

旅仕度をすましたところへ、幸右衛門が来た。その幸右衛門へも、妻の丹女へも、

「留守をたのむぞ。——仔細しさいは追々と、また便りするであろう」と、云ったのみである。

着きがえの帷かたびら子一枚、鎗やり一筋、鎧よろい一領——それだけを、供になに担になわせて、十内は、もういちど老母の部屋を窺うかがつてみた。

「よくおやすみらしい」

つぶやきながら、十内は、襖ふすまの外まはに坐つて、両手をつかえた。

そして、

「行って参りまする」

と、礼儀をして立つた。高齡九十の老母は何も知らず熟睡うまいしていた。

実に、不意も不意。

鎗一筋、鎧一領を携たずさえて、いかにも清すがすが々と立ってゆく良人の影を、門辺かどべに佇たたずんで見送りながら、丹女の頬には春の世間をよそに、一すじの涙がわれ知らず流れていた。

「——武士の妻が」

と、身に云い聞かせて、彼女はあわてて、家の中へかくれた。

#### 四

この日から、京都はおろか日本中が、江戸城中に起つていた稀け有うな大變事のうわさに持ちきつていた。

あさのたくみのかみ浅野内匠頭の切腹も、忽ち伝わった。吉良家きらけの混乱ぶりがな

お話題になる。とりわけて、この後、浅野家の遺臣が、どうするか、赤穂城が、どうなるか、世間の耳目じもくは、挙げてその動向にそそがれていた。

「お宅様でも、どんなにお驚きなすったことかと、寔まことにはや、胆きもがつぶれました。旦那様にも、即日、赤穂へお立ちとやら……。御内儀ごないぎ様の御心痛のほども、ほんとに、心から、お察し申しておりまする」

訪とう人ごとに、留守の丹女は、こう見舞われた。

——が、彼女は、客へ微笑ほほえみをわすれなかつた。と云うて、強しいて氣づよい振りをしてみせるのでもない。

「平素から公おおやけの事は、何も云わない良人でございますから、この

度もいつもの通りに国くに許もとまでというただけで、立つて参りました。あとで人様から告げられて、さては、そういうことだったかと思ひ合せ、いまは良人の身ひとつに限らず、どうか御家臣御一統さま、すべてが、よい御処置をあそばすように、それだけを祈っているだけでございます」

しかし——そうは答えても、決して心は平静であり得なかつた証拠には、もう乾きぬいて、風にも剥はがれかけている貼はり板いたの物を——さすがに彼女も二晩ほど仕舞い忘れていた。

もつとも、次の日、また次の日と、客はたえまもなかつた。良人の親友であり、また浅野家の藩医はんいでもある寺井玄溪てらいげんけいが、父子おやこして来るかと思えば、めつたに見えたこともない伊藤仁齋いとうじんさいの子



息東<sup>とうがい</sup>涯<sup>がい</sup>が来て、見舞<sup>みまひ</sup>つてゆく。

台所へ来る商人から、外で会う近隣の人々まで、彼女を見れば、そのはなしだった。ことば<sup>つく</sup>尽<sup>つく</sup>して、慰<sup>なぐさ</sup>めもし、見舞<sup>みまひ</sup>いもしてくれるが、もうその心の裏には、

(急に、これから、御浪人となつて、どうして暮してゆくんですか?)

と、探<sup>たず</sup>るような世間の通有性も、そろそろ彼女の顔いろを、姿を見まもり出<sup>だ</sup>していた。

「——おらるるかの、於<sup>おたん</sup>丹<sup>たん</sup>どのには」

「おお、十兵衛様でございましたか。さ、どうぞ」

「花も散<sup>か</sup>つたが、お門<sup>かど</sup>辺<sup>べ</sup>は箒<sup>ほうき</sup>目<sup>め</sup>立<sup>た</sup>つて、いつもおきれい。部屋

も縁も、艶々つやつやと明るう、御主人が留守とも見えぬ。……いや、

かげぜん  
陰膳まで」

と、客は、床とこへ眼をやつて、沁しみ々じみ何か感じ入っている。

十内の従兄弟いとこで、京都の町与力よりきを勤めている同姓の人、小野寺

十兵衛だつた。

よく留守おとのを訪うてくれる。またいろいろな消息を知らせてもく

れた。きようも袂たもとから一通の書面を出して、

「ただ今、赤穂からの飛脚がついた。十内どのの御消息じゃ、読  
むも涙……。急いでお目にかけて参つた」

と、それを丹女にすぐ見せた。

——何ものこらず、具足一領、鎗やり一本、白帷子しろかたびらひとつ、挾は

箱さみばこに入れて下り申し候そうろう。

老母、妻にも、こころざしは申し聞けず、様子にて、覺さとり候も不知しらず、いよいよ相果あいまて候わば、母妻ははまの儀、御芳志たのみ奉り候。たのみ上げ候上は、虫同然の小家の者共、お恨うらみ申しあぐ可べき訳も無これなく之候そうろう。

且かつまた又、此方共は、籠城して、途を開くべき為には無これなく之、ただ各 城と共に自滅の覚悟にて候。妻より人遣つかわし候わば、御大儀ながら御越し候て、この書中の通りを、よき程に読んでお聞かせ下さるべく、女子おなごでも、さのみ騒ぐまじく覚え有これあり之候ありあいだ、仰せ聞け下さるべく、猶な々お々お、一分ぶんの事ことにいたりては、一家の名を下すようの事は之これあるまじく候間、お

こころ易やすかるべく候、以上。(略意)

「十兵衛様。おねがいのござりまする」

その時、うしろの襖ふすまをあけて、両手をつかえた者がある。見ると、養子の幸右衛門こうえもんであつた。

「わたくしも、ぜひぜひ赤穂へ下りとう存じます。部屋住の身とて、かくておるべき秋ときではございませぬ。——が、今日までは、祖母や養母のみ氣遣こころわかれて、じつと、忪こらえておりましたが、御家中の方々も、また養父の決意も、それと極こりましたからは」

兄の大高源吾も、姉の良人、岡野金右衛門も、その子九十郎も、すでに赤穂の城中にありと耳みみにしているのだ。——幸右衛門の氣もちこころは察さしることができぬ。

「どうぞ、十兵衛様からも、母上へお願いして下さい。主家あつての家名、主家なき今日、幸右衛門のつぐ家名はないと考えます。養父に死におくれては、一日とて、世上に面は曝おもてさらされません」と、若い血しおを押し抑えて、努つとめて、慎つづましやかに云うのであつたが、涙は滂沱ぼうたとして、畳をぬらしていた。

「よう云うて下された。支度は母がととのえてあります。あとのことは憂うれいなく、いつなと赤穂へ……」

丹女は立つて、さながら出陣のそれにも等しく、すべて浄きよらかな木綿もめんの肌着、腹巻、小袖、細こまじ々した旅まの具ものまで、一揃いそこへ運んで来た。

## 五

——六日、七日の文、ふみおのおの一度に届き申し候。そうろう母様、何事のうち御座なされ候由、よしうれしく存じ候。ずいぶん心をつけて、朝夕の御食、うまきようにして進じ申さるべく候。そもじ、いよいよ無事、一段の事にて候。ここもとの儀、気づかいの由、もつとも候。さぞさぞと思ひやり候。

幸右衛門が赤穂へさして立ったのと行きちがいに来た十内からの手紙だった。さきに丹女から出した文の返しであることはいうまでもない。

つづいて、数日の後、また便りが届いた。——旅に在る日とか、

何かの公用で、夫婦離れてある日など、こうして妻から良人から、交 《こもごも》に筆の便りを交わすことの仲のよさは——今に始まったことではない。

(およそ、はた目にも、羨うらやましくもあり、見よいものは、小野寺夫婦じゃ)

とは、同藩の者からも、長年、範はんとして、云われていたものである。

わけて今度は、その情も、さらに切なるものがある。十内のがみには、また必ず、九十になる老母のことが書いてあった。

——存じの通り、われらは御家の始めより、小身ながら今まで代々百年の御恩にて、各を養い、身あたたかに一生をく

らし申し候。

身不肖みふしようにも小野寺家の嫡孫ちやくそんにて候、かよふの時、うろつきては、家の疵きず、一門のつらよごし、時至らば、心よく死ぬべしと、思い極め申し候。

老母をわすれ、妻子を懐したわぬにてはなけれど、武士のぎりに命をすつる道、ぜひに及ばぬところと合点して、深くなげき給うべからず。母御さまにも、幾ほどの事もあるまじく候、いか様ようにもして、御臨終を見とどけて給わるべく候。

年月の心入こころいれにて、じよさいあるべしとも、露ちり思わず、申すに及ばず候え共、たのみ参らせ候。わずかの金銀家財、これを有りぎりに養育しまいらせ、御命なお長く、たから尽



きたらば、共に飢え死に申さるべく候。……（大略）

今にも赤穂表は合戦にでもなるような沙汰が聞えた。城受取の使者が幕府から向けられたという。籠城の赤穂の遺臣はおそらくただは渡さないだろうという。諸説、風声、区々まちまちであつた。

その中にも、十内から妻への便りは、絶えなかつた。

——さてさて思いがけぬ世のありさま、昔語りにきく上じょうや也や  
 上しょうにん人の太平記たいへいきようの物にて見聞せし風情ふうせい、いま此身このみになりて、  
 まことに風の前の燈火ともしび、葉ずえの露と争う命となり、日頃、よ  
 ろずに就て深かりし慾を忘れ、心のきよきこと水の如くにて、禍わざわい  
 は却かえつて、出離しゅつりの縁かと覚え候……。

と見えたり、また、

そこ許もとの住居のことも、女の身としてなんぎの程、思いやられ候ていたわしく候。

と、日頃からやさしい良人であつた一面を見せていたりした。

「もう、この世での、家庭の日は」

と、丹女の観念も、そこに行き着いていたが、赤穂表の情勢は、急転直下、開城退散ときまり、同志の密盟とかたちを変え、ために、思いがけなく、彼女はふたたび良人おとと十内のすがたを家に迎える日に会つた。

所詮しよせん、前のような生活はしてられないので、十内が帰ると、すぐ家は引移ひきうつった。

東洞ひがしのとういん院いんの西、竹之辻たけのつじという藪やぶ添ぞいの手狭い浪宅なみたくだった。

けれど、その年の夏から、翌元禄十五年の秋までの、一年余りの佗暮わびぐらしは、丹女にとつて、もう一度あら新たに十内へ嫁かして、百も年もとせのちぎりを結び直したほど、欣ばしくもあり楽しくもあつた。

世間の眼は、ようやく、赤穂の遺臣の心根こころねに猜疑さいぎを向け、かげ口、露骨ろこつな誹そしり、蔑いやしみなど、冷たいものの中ではあつたが、

(誰か知ろう万丈の雪)

と、十内はいつも笑っている。また丹女も、貧苦とたたかい、そうした世間をひがみもせず、やがての日には、必ず相別れる良

人を、いかにして一日でも機嫌よく送らせることができるか、また、自分も心残りなく楽しんで暮してゆけるか、それのみに心をくだいて、一日一日を愛し<sup>いと</sup>んでいた。

遂に、その日は来た。九月となつた末である。大石内蔵助が<sup>くらのすけ</sup>山科<sup>やましな</sup>を引払つた後、在京の同志も、前後して江戸へ下つて行つたが、小野寺父子も、いよいよ都を立つことになつた。

竹之辻の浪宅では、一夜、極く内輪のものだけで、小やかな別宴<sup>ささひ</sup>がひらかれた。忍びやかに会した客は、十内夫婦の和歌の友金<sup>か</sup>勝<sup>ねかつちあき</sup>千秋、論語の師伊藤仁斎<sup>じんさい</sup>と東涯<sup>とうがい</sup>の父子、医師の寺井玄<sup>げんけ</sup>溪<sup>い</sup>など、ほんの八、九名であつたが、手狭な一室はいっぱいになつていた。

十内の姉の貞立ていりゆう尼も、手伝いに来ていた。ことし九十一となつた老母は、どんな思いを抱いているのか、或いは、世のあらゆる音騷おんそう色相しきそうをあたかも春秋の移りのように諦観しきっているのだろうか、子の十内と、孫の幸右衛門のあいだに、ちよこなんと低く坐つて、うす眼をふさいでいた。

「ああこれは……てまえが一昨年、御母堂の九十の賀に書いてあげたものですな」

仁齋は、床の一軸じくを見て云つた。瓶へいには黄菊が挿いけてある。墨の香と菊の香とが、薰くんくん々と和していた。

「父の詩ですか。父の仁齋は、まだかつて、人のために寿詩じゆしを作つたことがないのに、十内どのには、よくよく歡びを共にしたも

のとみえまする。わたくしが、吟ぎんじてみましようか」

子息の東涯は、酒さかずき杯をほして、虹にじを吐はくように高吟した。

母子年高ク九十強キヨウ

無憂無病又無傷

老来ノ孝思誰力能ク識ヨシラン

膝下シツカ猶呼ンデ小郎トナス

老母は、それにも寂然としていた。風を聴く老松のようだった。

千秋は、自作の国こくふう風を朗詠し、風流な十内も、近ごろ覚えたと

いう上方かみがたうた唄などを歌った。

興きようも酔も、ほどよく座を繞めぐった頃、奥の老母の部屋から、琴ことの

音が流れて来た。人々は一様に、酒杯をおいて聴ほき惚れた。ここ

にいる内輪の人々には、誰にもすぐ琴の主がわかつていた。宵から人知れず台所へ手伝いに見えていた千秋の娘のお稲にちがいない——と。

「みな様へ、この媼おばなから、おねがいがあるが」

九十一の媼おうなが、初めてつぶや呟くように、云い出したので、何事かと、客の眼はみな、その唇元くちへそそがれた。

「あの娘こがいとしい、可憐いじらしい。これへ招いて、幸右衛門から杯などやって欲しい。十内どの、どうであろう。千秋様、思おぼし召めしは、どうお座りませうの」

すると、座にいた幸右衛門は、顔を真っ赤にして、

「おば様、御無用ですつ、なまじ、相見あひまて別れるより、私は琴

の音を聞いたのみで心が満たされている。おそらくあの人もそうでしょう。琴の返しに、私からも、一首吟じて答えます」

とても世に

ながろうべくもあらぬ身の

かりのちぎりを

いかでむすばん

むかし楠木正行が吉野の宮居で弁之内侍を賜わるとの勅を

拝辞して詠んだという和歌である。時と人こそちがえ、人々は幸

右衛門の心根を充分に酌みとることができた。

「おう……おう……」

老松のような媼の面にも、一すじの涙がながれていた。



幸右衛門は、次の朝、家を立つた。——十内もそれから七日ほどおいて同じ東の空へ向つた。竹之辻の家には、丹女と九十一の媼と、ふたりきりになつた。

## 七

江戸へ下る途中からも、十内は幾たびも、妻へ便りを送つていた。

ふるさに

かくてや人の住みぬらん

ひとり寒けき

## 志賀の浦松

だの、また、

かぎりありて

帰らんと思う

旅にだに

なお九重ここのえはこいしきものを

などと折々の詠草が、手紙の末にはかならず一首二首書きそえられてあつた。

この秋の暮、ふつと、燈ひの消えるように、九十余の老母は死んだ。良人の帰らぬ旅立ちも、老母の死にも、いまは動じることのない丹女たんじよであつた。やがて辞すこの世の、夫婦一家のものが、

長らく恩おんしやく借かしていた国土こくどに対して、あとの塵ちりを浄きよめておくべく、間際まで散りやまぬ落葉らくえつをも余さず掃はいているような気持であつた。

師走しわすの十三日附で、江戸から来た良人の手紙には、

——忠義ちゆうぎに死したるからだを、天下のものあめのふに示して、人の心こころを励はげまささん事、却かえつて本望ほんぼうにて候まう。

とあり、なお、

——ゆめゆめお氣遣きづかいめされまじく候、もはや言うべき節ふしもなく、ただただそここゝもとの事、思おもいやるばかりにて候。

と、見えた。そして、大石主税おおいしちかからの短冊たんざくが一葉封じてあつた。

復讐ふくしゆうの拳こぶしは、翌十四日に決行され、一盟四十七士の大志は、貫か

徹んてつした。そして、次の消息は、大石内蔵助たちと共に、お預けとなつた細川家の内から来た。

翌年の二月初め——切腹のその日まで、十内と丹女との文通は、ひと目うらやも羨むほどだった。

丹女からの手紙の端はしに書き送つた歌——

ふでのあと

みるになみだ泪しぐれの時雨来て

いかえすべき言の葉もなし

は、義士たちの仲間にも、細川家の家士のあいだにも、評判となつて、十内夫婦の仲は、まるで若夫婦でもあるように、人々から、からかわれた。

「そう、おからかい下さるな。せがれの幸右衛門は、まだ独り身ひとでござれば」

十内は、真顔になって、それへ答えた。

倅い、同じ細川家へとお預けになったので、幸右衛門は、養母に代つて、切腹の朝まで、養父の世話をよくした。十内が着物に綻ほころびを切らすと、さつそく針と糸を借りうけて、それを縫うことまでしていた。

むさし野の

雪間も見えつ故郷ふるさとの

妹いもが垣根の草も萌もゆるらん

二月三日付の手紙とこの歌が、十内の絶筆だった。同じ朝、四

家に預けられていた義士ことごとくいさぎよ潔い切腹を果したのであった。

丹女は、百カ日頃まで、家に籠こもっていたが、やがて一切の家事をきれいに片づけ、六月初め京都の本ほん圀寺へ行って食を断っていたが、その月十八日、高嶺たかねの雪のいつか消えるように逝いた。

つまや子の待つらんものを

急がまし

何かこの世に

おもいおくべく

所持品としては、したたこう認めた一葉の短冊しかなかったとのことである。







# 青空文庫情報

底本：「剣の四君子・日本名婦伝」吉川英治文庫、講談社

1977（昭和52）年4月1日第1刷発行

初出：「主婦之友」

1942（昭和17）年1月号

入力：川山隆

校正：雪森

2014年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 日本名婦伝

## 小野寺十内の妻

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>